

みよしらの 伝説



宮代町郷土資料館

はじめに

宮代町郷土資料館では宮代町に伝わるさまざまな伝説や逸話を収集しています。その成果は平成13年度刊行の宮代町史民俗編に掲載する予定ですが、ここでは現在までに収集した伝説を掲載します。生徒の皆さんの学習などに活用していただき、郷土みやしろの文化への理解と愛着を深めていただければ幸いです。

神社やお寺に関する伝説

宮目姫の伝説（姫宮神社）

今からおよそ1,600年程のむかし、都が奈良から長岡京、そして平安京へと移されて間もないころのことです。桓武天皇の皇子に良峰安世という人がおりました。この安世王には美しい一人の娘がありました。

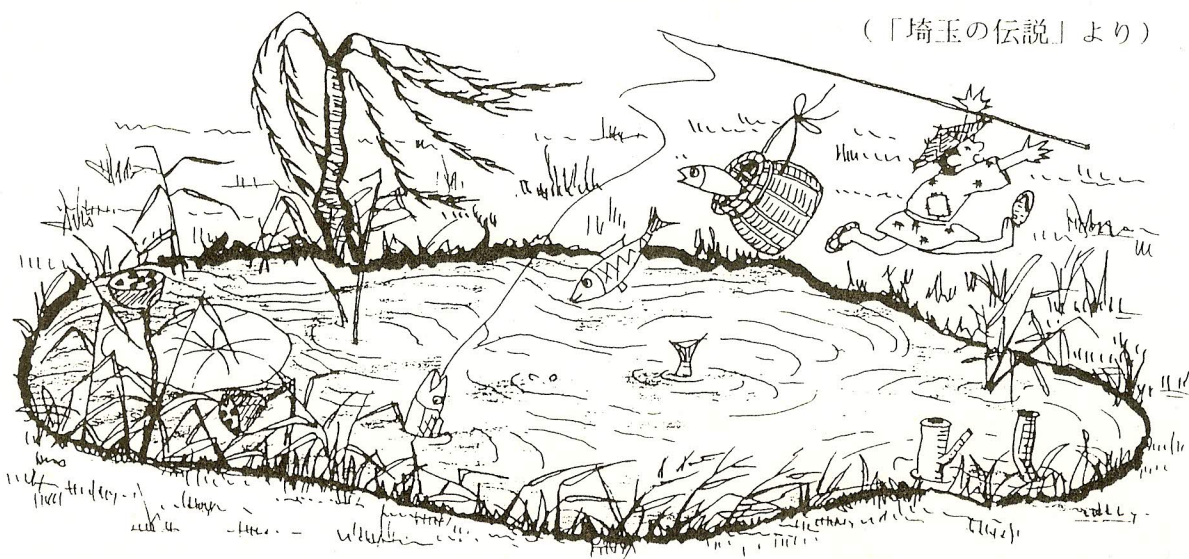
この宮目姫、東国の秀才滋野国幹に伴われて下総国に行こうとして、武蔵国百間の里、紅葉ヶ岡という所にたどりつきました。頃は天長元年長月（823年旧暦の九月）、山中の紅葉の眺め美しく、浜の砂と調和してそのみごときは言葉につくせない程でした。姫はこの景色に見とれ、国幹と共に馬のたづなを止めて地主権現の祠のそばで休み、景色を眺めておりました。そうこうしているうちに、いつしか陽は西に傾き、霜気が肌に寒く、突然姫は激しい瘧に見舞われました。都から遠く離れた片田舎では何の手当のなすすべもなく、夜半頃姫はとうとう息を引き取ってしまいました。国幹は天に祈り、地に伏し泣き叫びましたが姫はついに生き還りませんでした。随従の家臣に慰められ泣く泣く姫の亡骸を岡の西の辺に埋め、下総へと向かいました。この頃には岡の近くに住む人もあり、のちに「姫の塚」と呼んで花をあげる者もあったと言うことです。その後、天長5年（828年）のころ、慈覚大師が故郷の下野に下るとき、姫の事を聞き、回向して里人について祠を建て姫宮明神と呼んだということです。（「みやしろ風土記」より）

身代神社の池

身代神社の池はもと、荒川の流路だった名残り、魚が多く、釣りをすると非常によく釣れる。

しかし、釣り終えて持ち帰ろうとすると、池の中から「オイテケ、オイテケ」という声がする。恐ろしくなって、だれでもおいてきてしまう。もし、持ち帰って食べると、零落して村にいられなくなるといい伝えられ、その魚は誰も食べない。

（「埼玉の伝説」より）



身代わり薬師（真蔵院）

須賀の真蔵院には身代わり薬師というものが祀られている。その縁起によると、伊藤修理大夫光重という者が無実の罪のために北条時氏の軍勢に討たれた。その軍勢が須賀の地にさしかかると、にわかに光重の首が重くなって、いつか薬師の首と代わっていた。伊藤の家で尋ねると、光重は傷一つ受けていなかった。時氏も薬師の靈験に感じてただちに光重の罪を許した。それとともに鎌倉に薬師を迎えようと思ったが、どうしても重く動かすことができなかった。しかし、須賀の領主の形辺左衛門尉が、夢のお告げを受けて、薬師の堂を造ったところが、やすやすとその首を移すことができたという。

（「埼玉県伝説集成」より）

ぶっさり地蔵（宝光寺）

西条原の宝光寺にある地蔵尊をぶっさり地蔵という。昔、近郷近在の若者が、杉戸宿の遊郭へ遊びに行ったところの話である。夜道を歩いての帰途、宝光寺の近くになると若い娘が肩におぶさる。背負いながらわが家も近づいたので振りむくと地蔵尊がおぶさっている。あわてて問いただすと、宝光寺の地蔵だと答えたという。（「埼玉の伝説」より）

女躰宮の由来

その昔、京都で学問を教え、厚い信頼を受けていた蓮谷の鈴木家の先祖の一人は三条家の姫君と恋仲になった。しかし、結ばれぬものとある日突然京都を発ち当地へ戻ってきてしまった。姫君ははるばる京都から跡を慕ってやってきた。ところが途中何物かに襲われ、当家に実家からもってきた家紋入りの器を置いて、近くの池に身を投じてしまった。家人や近くの人達はいかにも姫君を哀れと思い、池のほとりに「女躰宮」を祀って姫の霊を弔った。

（「みやしろ風土記」より）

履掛地蔵（くっかけじぞう）（西光院）

西光院の門前に地蔵尊が祀られている。これを履掛地蔵とよんでいる。

昔、僧行基が来て、当所に履を掛けたところなので、履掛地蔵といった。また、舟山地蔵ともいっているが、その理由はわからない。西光院には行基の塚というものがある。これは和州菅原寺から遺骨を移した由伝えられている。（「埼玉の伝説」より）

古利根川出現の観世音（西方院）

西方院の観音堂は蓮台山流水寺と称す。本尊十一面観音は行基の作といわれる。この観音は、大洪水の際、古利根川を流れて来たのを拾いあげて、西方院に奉祀したものであるという。
(「埼玉の伝説」より)

その他

ネギを作らぬ話（東）

百間東の字ではネギを作らない。もっとも、もらって食べるのは差し支えないという。それは行基菩薩がネギがきらいだからという。なお、百間東の名刹西光院は行基菩薩の草創で、字の人々はみな同寺の檀徒である。
(「埼玉の伝説」より)

八百比丘尼を祀った堂（中）

昔、若狭国から一人の比丘尼が天沼（字中）に来た。魚を食物とし、一年中着物を着ていなかった。顔は美しく、髪はいくつになっても真っ黒で、八百年生きたから八百比丘尼といった。
(「埼玉の伝説」より)

小豆とき（西叡原）

西叡原と白岡町の境を流れる小堀に架けた橋を「ゆらぎ橋」という。この橋をお葬式の列が通るとユーラリ、ユーラリと橋がゆれるのでこの名がある。

昔、このあたりを夜通ると、小豆をとぐ音が聞こえてきたという。

(「埼玉の伝説」より)

参考文献

『埼玉県伝説集成 上・中・下』 葦塚一三郎著 北辰図書

『埼玉の伝説<日本の伝説13>』早船ちよ 諸田森二著 角川書店

『みやしろ風土記 増補』 宮代町教育委員会